

社会科における教授・学習過程の研究 [第Ⅳ報]

—課題解決的方法の検討—

織田 長繁 高森 充 都築 亨 中尾 正三

I 今までの研究概要

織田 長繁

昭和35年以降、社会科の学習過程の分析を研究の中心問題としてきたが、特に36年夏より広岡教授の指導もあって、社会科の望ましい一つの指導形態として「課題解決学習」をとりあげ、その学習過程の研究をすすめてきた。

36年度、中一、(中央高地地方)、中二(織豊政権の時代)について、それぞれ系統学習と課題解決学習の比較分析。

36年度冬、高一の地理(日本の農業)における同比較。

37年度、中一(アフリカ)外国地誌指導についての同比較。

38年度は、地図の学習及び自発学習に焦点をおいたが、課題解決学習の検討がその根底におかれていた。本年度はそうした実践の上に立って、

(1) 中一の地理的分野

「九州地方」と「東北地方」について、それぞれクラスを変えて、課題解決学習(以下K案)と提示学習(系統学習、以下T案)の比較検討を行った。

(2) 中二の歴史的分野

課題解決学習のすすめ方を、一方はK案において試み、他方は自発(発表)学習の中で試み、その間の比較分析を行った。

「課題解決学習」とは何か。

課題解決学習は問題解決学習と提示学習(系統学習)のそれぞれの要素を含んでいるので、両者との関係で考察する。

(a) 問題解決学習との関係

問題解決学習のもつ欠陥(生徒の恣意的な興味、関心、知識のつまづき、客観的事実認識の弱さ)を克服するため、①課題のとらえ方、解決の方向は生徒の主体的思考活動を重視しながらも、客観のすじ道——教師の枠づけが中心となる。②課題は生徒の経験の具体的事象に限るのではなく、時間的空間的に離れている問題、(歴史的時代課題や地域課題など)

や抽象的理論の問題に及ぶ。③学習の形態としては一斉学習が中心となるが、客観の道すじにそった集団思考の発展を期待する。

(b) 提示学習(系統学習)との関係

科学の成果に基づく客観のすじ道を重視する点は同じであるが、①提示学習が科学の成果を系統的に提示するのに対して課題解決学習は、その成果や結果が生まれた過程を重視する。それは生徒の発達段階と能力に応じて知識、技術などの成果を再発見させることである。②提示学習は一方交通的に教師が教え、生徒が受け取るという形をとりやすいのに対して、課題解決学習では、成果や結果の生れたプロセスを平易に今一度たどることによって、生徒の主体的、能動的学習活動が可能となる。③そして、生徒の主体的思考は決して恣意的、主観的になされるのではなく、事実即した思考—**Realthinking**が要求され、事態がもつ客観の動向と一致するように指導されなければならない。

課題解決学習の学習過程、その大筋は

- | | |
|-----------------------|---------|
| (1) 課題の発見 | } 導入の段階 |
| (2) 学習順序の決定と枠づけ | |
| (3) 内容の展開とつきつめ——展開の段階 | |
| (4) 学習のまとめと発展——総括の段階 | |

勿論、このような定式は、依然として仮説の段階にあり、必ずしも固定したものではない。

しかし、考え方において、最近「問題解決学習の再検討」の形で出されている現場の教授・学習指導への反省は、我々に多くの示唆を与えてくれる。

我々は教授・学習過程の問題を単なる学習形態として固定的に考えているのではない。それは何よりも、教授内容と指導的方法的条件に即して、言わば現行の教科書の系統・内容・教材配列等は批判され組み換えられなければならないという立場に立っている。

以下、社会科の各分野について、さらに高校の世界史、倫理・社会の場合については講義学習と自己展開学習の対比からも、問題点を検討したい。